

「宮崎県立美術館のこれからを語る会」  
～公立美術館の役割や宮崎県立美術館の課題～  
議事録

平成28年8月7日（日）  
14：00～16：00  
県立美術館アートホール

開会  
知事挨拶

今日は「宮崎県立美術館のこれからを語る会」に、大変御多用なところ、また暑い中に、県内外のから講師の方々にお越しいただきまして、本当に感謝申し上げます。そして、多くの参観の皆さんもお越しいただいており、美術館の在り方に対する関心の高さを今受け止めているところです。限られた時間ですが、しっかり実りある意見交換をさせていただくことができればと思っています。

リオデジャネイロオリンピックが開催し、サッカーがナイジェリアに惨敗し、どうなることかと思ったところですが、ようやく金メダルが取れたということで、気持ちよく今日来たところです。

皆様は開会式は御覧になったでしょうか。ブラジルの歴史や伝統文化、国の成り立ちがアピールされていました。4年後にオリンピック・パラリンピックを迎え、開会式では、やはり日本の歴史や文化をアピールする場になると考えています。今、県では、宮崎の天の岩戸開き、神話を開会式で紹介したいと考えています。

また、先日、全国知事会が福岡で開催されました。その中で、スポーツ・文化・観光というプロジェクトが新たにでき、私が座長として取りまとめをさせていただいています。4年後のオリンピック・パラリンピックにおいて、世界の注目が集まり、多くの方がお越しになる中で、この機会をスポーツ・文化の振興、さらに観光とからめ、さらに観光では特にインバウンドの視点を踏まえ、全国知事会としても国に対していろんな提案をしていこうと考えています。

このプロジェクトチームは、興味のある県が手を挙げて構成しており、36県が参加しています。他のプロジェクトチームと比較すると圧倒的に多いプロジェクトであり、それだけ4年後を視野に入れ、関心が高いということを感じます。そこでは、スポーツ施設や文化施設を整備するためのいろんな財源措置を国に求めるという提言もあります。また、いろんな観光の周遊メニューなど、スポーツや文化の面と関連付けて、自治体同士で連携を深めていく議論もしています。本県としてもスポーツ・文化・観光、それぞれ重要な要素でありますので、しっかり連携を図りながら、本県ならではの取組を進めていきたいと思っています。

そのような大きな文化の流れの中で、美術館の在り方についての今日の議論の場があります。おかげさまで、この県立美術館が開館20周年ということで、昨年20周年の記念式典を行いました。その後、20年という節目にあたり、これまでもいろんな努力をして今の美術館があるわけですが、いろんな御意見を頂戴したいと考えてます。次の20年、さらにその先を見据えながら、この美術館の在り方を改めて考えてみようということで、本年2月に初めて議論を行いました。そのときは県内の方を中心にした意見交換でしたが、今回は、県外でそれぞれ専門的な立場で運営等に当たっておられます講師の方をお招きしての意見交換です。

話は変わりますが、宮崎は、ようやく高速道路が福岡とつながったり、国際線が3つできたり、さらに大型クルーズ船の16万トン級も入るようになったりするなど、陸海空の交通インフラが整いました。例えば、農産物の輸出なども、これまでは数億程度ありましたが、25億になり、飛躍のときを迎えており、「今、宮崎が元気です。」と県民の皆様にも申し上げているところです。

視野をもう少し広げてみると、全国にはもっと元気な県はたくさんあります。九州の西側であれば、高速道路は最初から通っており、新幹線もありますし、本県は25億ですが、鹿児島は49億です。

宮崎も外国人のお客さんが増えていますが、日本全体では、いよいよ2000万人を突破しようとしているときを迎えています。申し上げたいことは、我々もいろんな分野で頑張っ て歩みを進めてきております。その手応えを感じながら、さらにいろんな分野に関して、よりよいものにしていきたいと思っています。

さらに視野を広くすると、もっともっとできることがあるのではないかと考えております。それは、今日の美術館の在り方、美術振興の在り方という面です。今日は、特に県外の講師の方に御指摘いただきながら、視野をもう少し高く、広く、物事をとらえるとともに、この宮崎県立美術館の先人の努力によって、ここまできたということの手応えを感じつつ、さらに議論を深めていきたいという思いがあります。

冒頭少し思いを含めて長くなりましたが、是非とも忌憚のない御意見を頂戴し、よりよいものをつくっていく、さらによりよいものにしていくため、今後、県民の皆さんともいろんな形で議論、さらに検討を進めていきたいと思っています。

今日、御出席をいただきましたことに重ねて感謝を申し上げ、冒頭の御挨拶とさせていただきます。

協議  
司 会

本会におきまして、全国から著名な皆様方にお集まりいただきありがとうございます。本日は、専門的なお立場から、さらに、いろいろな視点からたくさん御意見をいただきまして、有意義な会になればよいと思います。

最初に協議の流れの確認ですが、このあと30分間は、雪山さん、米田さん、安永さん、大原さんの4名の方々に美術館に係る実践事項や全国の動向などを発表いただきます。その後、協議という形で60分間、今後の宮崎県立美術館がどうあればよいかということについて、たくさん御意見をいただきたいと思っています。

それでは柱①につつまして雪山さんから御説明をよろしく申し上げます。

雪山氏

私は数年前から宮崎県立美術館の美術品収集審査委員を務めてきました。それから、遙か昔のことですが、私がかつて東京の国立西洋美術館に勤めていたとき、都城市立美術館で西洋美術館のコレクションを展示をさせていただいたことがあり、宮崎とはいろいろお付き合いをさせていただいています。今回、宮崎からお声をかけていただいて大変うれしく思います。

現在、私どもの富山県立近代美術館は市内の別の場所に移転することを計画しています。そして、新美術館の建設工事も今、最終段階を迎えています。年明けには建物本体は引き渡しになります。そして、来年の春から使用できる場所はどんどん使いはじめ、来年の8月末には全面開館を予定しています。

私が富山県立近代美術館の館長に就任したのは2012年4月のことです。1976年から22年半も西洋美術館におりまして、そのあとは愛知県美術館、横浜美術館、和歌山県立近代美術館と、いろんな美術館におりました。実は、私の生まれは富山で、「富山生まれなら、最後に富山にもどってこい。」と知事に言われて、4年前から館長を勤めさせていただいております。

私が富山に参りましたときは、新しい美術館をつくる計画は全くありませんでした。3年ぐらい前に、知事から突然「新しい美術館をつくりたい。」と言われました。

富山県立近代美術館は1981年（昭和56年）に開館しておりますが、開館してまもなく国の耐震基準が厳しくなりました。ほとんど開館時から耐震基準に満たしていなかったのです。富山県はこれまで直接大きな地震に見舞われたことがなく、富山には地震は絶対くるはずがないと富山の人は信じており、この問題はそのままにしておきました。

しかし、「3. 11」の大地震が起こりまして、やっぱりどこで何が起こるかかわからない、このまま放置するわけにはいかないということになりました。国の耐震基準を満たしていない建物に、お客さんにどうぞお越してください、と言えない状況になったのです。

富山県立近代美術館は、展示室の真ん中に大きな吹き抜けがあるため、温湿度の管理が非常に難しく、また、ガス式の消火設備が使いません。美術館の展示室や収蔵庫では、通常、不活性ガスを瞬時にして充満させて酸素を奪うというガス式の消火設備を備えます。しかし、富山県立近代美術館では、建物の構造からそのような消火設備を使えず、スプリンクラーを使っています。火事が起こりスプリンクラーが作動しますと、辺り一面が水浸しになります。そのため、富山県立近代美術館には作品を貸さない、という美術館があります。これらの問題を解消するためには、全面的な改修が必要となり、そのためには20億とか25億というお金が必要となります。また、ハンディキャップをお持ちの方への対策など、さらにかなりのお金がかかります。そこで、富山県知事は、それだけお金がかかるのであれば、別の場所に新美術館をつくる方が得策だと考えました。富山県立近代美術館の移転新築問題は、ハード面の欠陥から始まり、ある意味、われわれにとっては降ってわいたような話でした。

しかしながら、美術館のハード面を整備するにも、その中で何をするのか、今の社会に美術館をどう対応させるか、また、将来に向かって美術館のビジョンをどうやってつくり、それをどう実現させるかが重要です。富山県の場合は移転新築が先に決まったわけですが、そのあとで急遽、新しいビジョンを作らなければならなかったもので、私や学芸員は苦労しました。

富山県立近代美術館は1981年に開館しましたが、あの頃は日本各地に公立美術館ができた時代です。富山近美では、ダダ、シュールレアリスムや戦後のアメリカ美術などを中心にコレクションを形成しました。瀧口修造という人を覚えてる方は少ないかと思いますが、富山出身で詩人で、美術評論家でもあり、日本にシュールレアリスムを紹介した先覚者です。当時の知事が瀧口修造に「富山県美術館の館長になってくれ。」と頼みましたが、自由人である瀧口修造は、「自分は不向きだから。」と断り、詩人の大岡信と美術評論家の東野芳明の二人を顧問に推薦しました。その二人の助言を元にコレクションを始めました。

実は富山県立近代美術館は宮崎県立美術館に似ている面があります。シュールレアリスムをコレクション形成の柱にしていることです。富山近美は、美術作品の購入に57億円のお金を使っています。開館が早かったのでよい作品をだいぶ安く買えました。配付資料のとおり、地方の公立美術館としては、まとまりのあるコレクションをもっています。

富山県立近代美術館でも、やはり鑑賞することを第一に考えており、開館したときには、アトリエなど館内にはありませんでした。あとで近く古い建物を入手して、今、アトリエに使っています。教育活動、美術館教育について、富山近美は開館以来かなり頑張ってきたつもりですが、後発の美術館が一般に美術館教育に関して非常に熱心であることから、今では、少々精彩を欠いている感じがします。

そのため新しい美術館ではアトリエ活動をもっと充実させて、見ることと作ること、つまり鑑賞と制作をもっと密接に結びつけよう、連携させようと考えてます。そして、さらに作ったものを発表する場として、小さいギャラリーを設けます。また、お子さんたちに来ていただいて、富山近美のコレクションをなるべく使って、何か新しい物を作ってほしいと思っています。他にも、アーティストによる公開制作にも力を入れたいと思います。

皆さんがアートの体験、美の体験というか体感を通じて、県民や美術愛好家が交流できるような場にしたいと考えています。

新しい美術館は、駅の北側にある環水公園につくります。環水公園は、子ども連れや若いカップルがたくさん集まるところで、年間140万人もの人で大変賑わっています。

いろいろなイベント、花火大会などもやっています。そういう場所にマッチした運営を考えています。

美術館が置かれる場所は重要な意味をもちます。また、その建物をだれに設計してもらうかも大切です。設計者を決めるコンペをしたところ、18の設計事務所が手を挙げました。審査の結果、公園と一体化した運営、ならびに防災という面を重視した内藤廣事務所の提案が高く評価されました。

環水公園の建設地はもとは子どもたちの遊び場で、「見晴らしの丘」という築山がありました。その上には「ふわふわドーム」がありました。これは中に空気の入っている大きなマットで、子どもたちが飛び跳ねる遊具です。子どもたちからそのような絶好の遊び場を奪うなという意見があったので、美術館の屋上に土を盛って芝生を植えて、その「ふわふわドーム」を設置することにしました。そこで、内藤さんに友人のデザイナー佐藤卓さんを紹介してもらいました。この方はNHKの子ども番組「デザインあ」の監修者です。大人が見ても大変おもしろい番組です。その結果、佐藤さんに、屋上に「オノマトペ庭園」というのをつくってもらうことになりました。「オノマトペ」というのはフランス語で、「ふわふわ」とか「によろによろ」とか「ひそひそ」のような擬態語や擬音語を意味します。それぞれ言葉にちなんだユニークな遊具を屋上に造ってもらうことにしました。

もともと富山近美は高校生以下はすべて無料ですが、新美術館では大人もチケットを買わずに屋上に上がって子どもと遊べるようにします。晴れているときは屋上から眺める立山連峰は最高です。さらに、3階にアトリエをつくり、そのアトリエからすぐに屋上に上がれるようにしました。佐藤卓さんは子どもたちにとって遊ぶことと学ぶことは同じだと考えています。私も同感です。新美術館では子どもたちの方向に少し軸足を移そうかなと思っています。

新しい美術館は、これまで「富山県立近代美術館」という名称でしたが「近代」は取りまして、「富山県美術館アート&デザイン」という名称にしました。1951年（昭和26年）に開館した神奈川県立近代美術館を皮切りに各地に近代美術館ができましたが、開館当時は「近代」には「現代」も含まれていました。それから半世紀以上たちますと、「近代」という言葉を示すのは、過去の一時代に限られてしまいます。富山近美のコレクションは20世紀美術に特化したコレクションなので、その意味ではまさに近代美術なのですが、新美術館では「近代」という制約を取って、古今東西の作品を今の視点からもっと自由に捉えたいと考えてます。20世紀美術史という歴史に即した見方でなく、何か新しい切り口をつくれるのではないかと考えてます。「アート&デザイン」という言葉ですが、富山県の西部では伝統工芸が盛んで、さらに高岡を中心にプロダクトデザインも頑張っています。そういうことからデザインというものも重視したいと考えています。

富山近美では椅子を240脚、ポスターを1万3000枚以上もっています。ただ物としてポスターや椅子を展示するだけではなく、佐藤卓さんも主張していますが、これからはデザインマインドを育むことに視点を向けたいと考えてます。

新美術館は、敷地も狭く、建設費が高騰していることから、あまり広いものは作れません。その上、富山は冬は天気が悪いので1階の4分の3は駐車場です。そういった状況なので修復室が作れなかったり、収蔵庫と書庫がせまかったりするなどの問題があります。また、美術館の活動は調査研究が基本になるので、新美術館を運営していく上で、調査研究、保存、修復のような部門をどうやって発展させていくかが大きな課題であります。

米田氏

まず自己紹介しますと、私の学生時代は東京オリンピックと大阪万博の間ぐらいの時期で、高度経済成長の右肩上がりの中で、あるとき、どうしても学芸員になりたいと思いました。ところが教員採用試験と違って、学芸員の定期的な採用試験もなく、「学芸

員って何するんですか。」って言われました。学校で言えば教諭のような、図書館で言えば司書のような、公民館で言えば社会教育主事というような、と説明してもなんとなくわかってもらえない状況でした。

私は学芸員になりたくて履歴書を25通作成して日本中を歩きました。縁あって千葉県教育委員会が千葉県立美術館を造るので専門家を求めているということで受験しました。50人ぐらい受験したかと思いますが、試験問題については、美術館や文化の内容かと思ってましたが、一般行政の上級試験で数学や英語などが出ましたので、無理かと思いましたが運よく採用されました。

昭和45年(1970年)に全国博物館大会が山口県でありました。その頃は博物館は古くさいということで、「文化センター」と言った方が近代的だという風潮がありました。そのような中、もうお亡くなりになった宮崎県立総合博物館の柳先生という方が会議の中で手を挙げられまして、「名前を改めれば近代的になるのか。」と話されました。「中身が近代的でないにだめだ。博物館や美術館は利用者と地域がつながっていく新しい経営をしていかねばならない。」というのを教えてくれたのは、その柳先生でした。

長崎県美術館はまもなく開館11年ですが、その前に長崎県美術博物館という時代がありまして、それは今の美術館の先祖であり、今の美術館の前の歴史があると思っています。協議の第1の柱が、公立美術館に求められることとありますが、「美術館は、地域と利用者をつなぐものである」と思っています。

私は、学芸員として美術館や博物館の設立や博物館利用促進に携わったり、学校と美術館をつなぐ仕事をしたり、市町村の美術館を造る仕事をしたりするなど、いろんな仕事をしてきました。また、全国美術館会議の全体の企画委員長は雪山さんですが、私は教育普及部会長です。現在は、かなりエデュケーターとか美術館教育というのが非常に発達しております。

阪神淡路大震災の後、兵庫県立美術館が安藤忠雄さんの設計でできました。そのとき兵庫県知事は、「橋やビルなどの建造物は、お金でなんとかなる。あの震災で肉親や親しい人を亡くして傷ついた県民の心は、芸術文化でしか癒やせない。」と話されました。そのとき遠く離れた千葉県などは財政危機で美術館・博物館が閉館に追い込まれているときであり、一番ひどい目に遭ったところが、これは必要経費だといわれたことにびっくりしました。今は、その言葉が励みになっています。

長崎県美術館は、年間約40万人入っていて、65ある県立美術館で第6位です。1位と5位が東京都で、他は政令指定都市のある大都会にある県立美術館です。

ある自治体が財政危機の中で公立の博物館や美術館の見直しを行い、頑張っていたが、外部評価委員の評価を受けて、閉館に追い込まれました。その判断はだれがしたかということ公認会計士であり、歳入と歳出のバランスシートで判断したものであります。私がショックだったのは、博物館や美術館が閉館に追い込まれる中、たった一人の県民も反対にこなかったということです。私は千葉の美術館にもどり「国や県も大事だけど、一番大事なのは県民です。それでも閉館に追い込まれる現状がある。そのようなときに、数人でも反対してくれる美術館にならないといけない。」ということ職員に話しました。私は、今、長崎の美術館でそういう気持ちでやっています。

安永氏

私が宮崎県立美術館のお仕事を手伝っていた頃は、宮崎県が一番元気のよい時代で、たぶん美術館が開館した頃にシーガイアができたかと思います。全国的にも宮崎は注目されていて、当時の県知事さんも元気がよかったです。そういう勢いで美術館ができたような感じがありました。

私は最初、収集審査委員会の委員でした。今は代わってますが……。当時は収集予算がたくさんありました。全国的にも「宮崎はすごいなあ。」と、他の美術館や画廊の方々が言っていました。その時代にマグリットとかピカソだとか、今ではとても手に入らないようなものまで収集しておりました。ピカソの作品は今も常設展示されています

が、あの当時は1点でも何億かしましたが、今はそれ以上するかと思います。たくさん購入できた時代に私はお手伝いさせていただきました。また、開館記念展もお手伝いさせていただきました。

その時から気になっていることがありまして、今回の協議の柱に関することなので述べますが、それはスタッフのほとんどが学校の先生から美術館の仕事のために異動してきたことです。一緒に仕事をしましたが、本当に優秀な人たちで、「こんな人がずっと美術館に骨を埋めてくれればいいのになあ。」とっていました。しかし、何年か後には学校に戻られて、すばらしい才能が美術館に残らないということになりました。これをやっぱりどうにかしないといけないと、その頃から思っていました。プロパーの女性学芸員が一人、開館準備室時代からいらっしゃるのですが、その人の活用も考えていく必要があります。やはり宮崎県立美術館の一番の課題の根幹はそこにあるかなと思います。

年報の利用者数を見ますと数字的に見れば、宮崎県立美術館は善戦しています。多くの県立美術館の中で決して悪い数字でないと思います。宮崎県立美術館は、例年、18万人から20万人前後であります。全国の県立美術館で10万人を切っているところはいくつもあり、そういう面では宮崎県立美術館は頑張っている気がします。しかし、それも前に新聞に書いてありましたが、パッケージ展を導入するという形で入館者を確保し、今の数字を確保している感じがします。それはそれで地方美術館はよいと思います。そういう実態はよいのですが、それを担う専門職がないというのは、やっぱり全国的に見ても宮崎県立美術館がなんとなく軽んじられているというか、立派な美術館でありながら全国的にも注目されないというのは、そのあたりに原因があるのではないかと思います。

大分県立美術館が今年の春に開館し、年間で50万人か60万人ほど入るなど、多くの方が訪れています。そのことを考えればパッケージ展もよいのですが、何か工夫を凝らす必要があるのではないかと思います。

今、私は福岡市美術館や福岡アジア美術館に関わっていますが、今、美術館が抱えている大きな問題は若い人が美術館に来ないことで、これは大問題です。例えば、美術を専攻している学生が一度も美術館に行ったことがないというのがたくさんいます。とにかく高校生や大学生が美術館に全く来ないのです。美術館に来る入館者はお年寄りばかりという状況になっているので、これを何とか打開しないといけないと思います。そのためには、高校生や大学生あたりがどうしても見に行きたいと思うようなパッケージ展を導入するのもよいと思います。例えば、スタジオジブリの展覧会なんかは若い人ばかりです。私は長年スタジオジブリと交渉して、福岡アジア美術館になんとかもってきましたが、そうした努力も専門学芸員だからこそできたことだと思います。

また、若いお母さん方が来ないのも気になります。これは福岡アジア美術館で成功した例ですが、毎年夏休みに「おいでよ絵本ミュージアム」という展覧会をします。1000冊の絵本を全国の書店から集めてもらったり、出版社に頼んだりして、その本をただ展示室に置いて、自由に手にとって読んでくださいという発想から始めました。ただ机の上に本を置いておくだけでは子どもは楽しまないのです、いろいろな場の工夫はするのですが、基本は絵本をただ読んでいいよというだけです。これが結構当たりまして、毎年5万人前後のお客さんが入ります。幼児は無料ですから収入にはなりません、お母さん方が連れてくるわけですから、その分は収入になります。夏休みになって子どもが朝から晩まで家にいて、お世話が大変ということで、お母さん方が何人かグループで美術館に来ます。子どもたちをギャラリーに行かせ絵本を自由に読ませ、お母さん方は別のところでおしゃべりなどを楽しむなど、これも一つの利用の仕方です。パッケージ展でもよいと思うので、何か新しい客層を掘り起こす工夫をすることが重要です。

簡単に自己紹介をしますと、今まで美術館のプロパーの先生方の話だったのですが、私自身の専門は建築計画で、美術館の建物や観覧行動などを長い間研究しております。同時に、まちづくりに関しては、建築の分野や都市計画の分野から研究をしておりまして、先日全国の博物館長会議で、地域振興と博物館というテーマで、パネリストとしてお話したことがきっかけで、こちらに呼ばれました。

そこで、私は美術館の地域との関わり方というテーマで、資料をもとにお話しさせていただきます。

まず、はじめに、宮崎県立美術館では、今まで地域との関係ということでは、アウトリーチなど、いろいろなプログラムが積極的に試みられていることを知って大変感心いたしました。そのときの地域との関わりというと、美術館から出向いていく、あるいは地域の人たちがこちらの展示室を借りて発表するということかと思えます。それはインタラクション、つまり「相互作用」で、地域と美術館・博物館が、それぞれ別の存在ということが前提でお互いに交流することを指します。これを超えて、トランスアクション、いわゆる「相互浸透」という言葉を使っていますが、一体となっているような活動をしていくことが、これからの美術館・博物館が目指していく一つの方向ではないかと考えます。そこで、「エコミュージアム」という言葉で、私はいろいろなところで見聞きしたり、勉強したりしているところです。「エコミュージアム」というのは、「エコロジカルなミュージアム」のことです。その地域全体で地域の人たちによって機能しているという概念であり、わかりやすく言うと、「地域まるごとミュージアム」という概念で、ミュージアムの地域化であり、地域社会のミュージアム化ということです。

これからの課題として3つほど挙げてみます。まず大事なことは、基盤形成として、ミュージアムの原点に立ち戻って考えてみることです。先ほど何人かの方が御指摘されたように、まずは調査研究をきちんとしていくことが大事だと思います。ミュージアムは、次々と企画展をこなすだけではなく資料を収集して保存するなど、「知識の蓄積」が役割としてあり、ここが公民館や他の社会教育施設と違うことです。そこが基板となって、それが「宮崎らしさ」ということを作っていくのだと思います。いろいろな活動は、場所を変え手間を変えていけばできます。貯まっていくものは、この地域しかないものとして貯まっていくので、このことをミュージアムとして重視していけばよいかと思えます。

一方で、知識だけでも当然だめです。特に美術芸術は、いろいろな方が言うように心が動くとか、わくわくするとか、そういうことが大事です。感動する、体験する、体感することを通じて、何か心が動いていくことです。このわくわく感は異文化体験から生まれます。そこで日本では、これから重要になってくるだろうと思うのは「文化の差異」ということです。私は東京に住んでいますが、東京では、多文化社会として、社会の中にいろいろな人が住むようになりました。多文化の理解ということ言えば、理解をする前にその差異、その差が何かということを考えていくことが必要です。その差をできるだけ日常に落とし込んでいくことが大事で、これがたぶん美術館の役割なんだろうと思えます。そういうのを「固有文化の理解」と捉えて、要するに人が育っていくのはそれぞれの文化がありますから、お互いを理解することが重要です。ヨーロッパなどで重視されている概念ですが、「ソーシャルインクルージョン」といって、「社会的にみんな巻き込んでいきましょう」ということで、日本では「社会的包摂」と訳されています。今までにも宮崎県立美術館では、活発に教育普及活動をやられています。これは促進役の人がいて、子どもたちに伝えるとか、子どもたちに何かを仕掛ける、仕向けるという「エドゥケーター」や「アニメーター」の役割です。しかし、ヨーロッパのミュージアムで近年重要になってきているのは、文化の違う人たちに対して、「文化のつなぎ役」が必要だということ。それを「メディアツール」とか「メディエーター」と言います。

キリスト教の美術をイスラム教の人に理解してもらうことは難しいことです。別の文

化をもっていた人たちは、価値観も違います。要するに美術作品そのものを理解するのではなく、その背景にある文化を理解しないとその意味に触れることができません。そういうことがむしろ重要な役割ではないかという議論が行われています。

先ほど安永さんが言われましたが、美術館に来ない人、美術館に来ていない人にターゲットを当てるのが大事です。エコミュージアムの分野では、有名なフレンヌというパリ近郊のエコミュージアムでは、以前からだれが一番来ないのだろうか、だれが一番地域に根付いていないのだろうかということ考えた結果、若い中高生ぐらいだということに気がきました。そして、ここで何をやったかという、その若者文化、ヒップホップというものをテーマにして、町でふらふらしている若い人たちに来てもらって、自分たちで展示をつくるよう働きかけました。展示といってもこのようなグラフィティが得意分野です。展示に参加させるという機会をつくることで、こういう人たちが今まで関わらなかったミュージアムに関わるようになりました。このように今来ている人を増やすのではなく、一体だれが来ないのかということに注目することがまさに重要です。バリアフリーとかユニバーサルデザインとか言いますが、さらにそれを越えたインクルーシブ・デザインの対応として、そこが重要ではないかと思います。

もう一つは、一般の住民が美術館に関わるという参加から、一体的に活動するということが、ますます重要になってくると思います。各地でエコミュージアムの活動を行っているのですが、例えば三浦半島でやっているのは、地域や文化、歴史や小説などを学ぶ市民団体のそれぞれが、ネットワークを組んでそれをエコミュージアムとして活動しています。要するに美術館や博物館が中心にあって、そこと地域との関わりということを超えて、地域でそれぞれに勝手に活動している団体同士の横のつながりとしてのネットワークをつくっていきます。この促進役が美術館であり、ミュージアムマインドをもっている美術館がその役割を果たす必要があると思います。また、茅ヶ崎で活動した例では、地域の中の様々な建築を巡って歩いて行くということを茅ヶ崎の美術館と連携して実施したことがあります。全体のエコミュージアムの中で、地域全体をミュージアム活動として「つないでいく」ということの重要性を指摘しておきたいと思います。長くなりましたが、これまでの問題提起という形でお聞きくださればと思います。

司 会

時間が足りなかったと思いますので、これから協議②の中で御意見を伺えればと思います。一つ協議の視点を設けます。これまでの発表や説明を受けてこれから県立美術館は「何とつながっていけばいいのか、何とつなげていくのか。」ということです。これまで出た地域の若者であったり、母親であったりいろいろあるかもしれませんが、また、人ではなく、ものかもしれません。何か考えるといろいろなことに繋がっていく、つなげていくということが今後の美術館の在り方として大事になっていくのではないかと思います。

米 田 氏

先ほど美術館は「県民と結びつかないと存在できない。」と言いました。長崎県美術館でやっていることで言いますと、他の美術館では、展覧会やワークショップでのアンケートを取っているところが多いのですが、当館では、毎月2回土曜日に美術館に対するいろんなアンケートを取っています。これからやってほしい展覧会や美術館で気づいたことなど、つまり企業で言えば顧客ニーズを集めています。県民が当館に何を望んでいるのかは、展覧会やワークショップだけではつかめません。そのようなアンケートの集計データが貯まってくると私たちがやろうとすることが具体的になってきます。

それから「21世紀ミュージアムサミット」というのを10年ぐらい前から神奈川でやっていて、世界の美術館長を4、5人呼んで実施しています。その中で印象的だったのが、アムステルダム国立美術館では、今から60年前からの毎年の入館者アンケートをもって、それをもとに調べた結果、その美術館に来ている大人の大半は、子ども

のときに美術館に来た楽しい思い出をもっていることがわかったそうです。美術館は楽しい場所なのです。子どもときにそのような経験があると、必ず大人になったら来るはずです。だから子どもたちを大事にすることが大切です。

もう一つは、1951年（昭和26年）博物館法ができて、美術館は社会教育施設だったのですが、70年代になってくると文化施設と言われてきます。では、今はなんとされているかという私の勝手なこじつけですが、今は男性でも80歳までは健康寿命であり、女性は87、8歳かと思います。40年間の勤務時間平均10万時間です。60歳で定年を迎え、それから80歳までの20年間を考えると、自由時間が102、200時間になります。相当な余暇を過ごす時間があります。ある意味、美術館は高度の福祉施設とも言えるのではないかと考え、高齢者も大事にすることが大切です。

「第三世代の美術館」という話です。80年代に「第三世代のコンピューター」というのが新聞に大きく出ました。最初のコンピューターは、丸ビルぐらいの大きさで、次はロッカールームぐらい、今は、回転寿司の皿にもマイクロチップが入るほどになっています。では、コンピューターが第三世代なら、自分たちは今、どの世代にいるかということですか。

「第一世代」は何かというと、正倉院とか陽明文庫とかで、そこの一番大事な理想像というのは、「保存」で、本音で言えば「見せたくない」ということです。そして、成立の背景は、「王様や有力寺院などの宝物」であり、そこで働く人は「番人」であります。「キュレーター」や「キーパー」は学芸員のことであり、これは「番人」からきています。

今、私たちはどこにいるかということ「第二世代」にいます。第二世代ということ、今の宮崎県立美術館も長崎県美術館もそうです。そのプリンシプルは、「公開・展示」、つまり「見てもらいたい」と思ってやっているのです。そして、それを支えている背景は、個人とか法人のコレクションで、ここで中心的に働いてきた人が「学芸員」なのです。

「第三世代」は、まだ生まれていませんが、大原美術館やサントリー美術館のように、第二世代であって第三世代を一部試行しているところもあります。今のだいたいの美術館は第三世代が入ってきていますが、第三世代のプリンシプルは「参加・体験」です。

「美術館や博物館は、なにかしてもらいたい」ということを大事にしていることの背景には、「地域社会の成熟」があるわけで、そこで働く人は、「記録者」、「レジスター」です。保存科学、修復、エディケーター、ミュージアムライブラリアン（司書）とか、そして、学芸員や学芸員補とか、要するに専門家の分業に入っているわけです。

今も美術館の中で、学芸課と普及課と、場合によっては保存課とかあるということは、分業の部分が始まっています。また、学芸員やエディケーターが、行政で課長職になるなど付加があってもよいかと思えます。

例えば、第一世代の印刷物は何かということ、正倉院であれば、白瑠璃など、名前が横に棒のように書いてあるので棒目録と言いました。第二世代の出版物は、展覧会図録でそこに作家の年表とか書いてあります。第三世代の出版物は、その美術館で出版したものです。書店で並んでおかしくない物です。この点では、大原美術館文庫や北海道近代美術館新書など、専門誌が出てきているのですが、まだまだ一般化していません。

さらに市民生活に深く入っていくような努力も始まっています。まだ実現していませんが試行中です。

もう一つ、若いころ、博物館法に書いてある「調査研究」、「資料の収集保存」、「展示及び教育活動」のこの3つの輪の重なったところが、博物館と言っていました。違うことに気づきました。実は、列車でいうと機関車に当たる部分が調査研究です。調査研究がしっかりしている館は、この輪が大きくなってきます。しっかりとした研究力がある館には、情報や資料が集まってきます。そして、情報や資料をたくさんもっている館には様々な展覧会やワークショップ、出版などの活動が活発になります。つまり、調査

研究の継続的な蓄積が大切です。職員がキャリアアップして出て行くのは賛成してはいますが、その美術館でしっかり根をはって待つことが大切です。

私たちは機関です。博物館施設は箱ではなく、「go to school」、「go to museum」など「the」が付きません。つまり機関だということです。機関とは目的をもって任務を遂行する組織です。また、そこには機能が大事です。そういう館の機能を高めるのは人ですので、育てていかないといけません。

私はたたき上げの学芸員で、野村監督と同じで、生涯一学芸員と言っていた人間が館長になってしまいました。私はお世話になった作家が亡くなるとお通夜に必ず行っています。通夜に行くとその作家の一生がよくわかります。作家と美術館の距離は保っていますが、私は必ず行くようにしています。

それからある著名な作家さんが亡くなり、命日にお墓参りに行きました。行ってみてわかったことがあります。そこにはサザンカの花が咲いていました。それはお弟子さんたちが12月に亡くなった師のために、命日に12月に咲く花を飾ろうと考え植えたそうです。そのような情報を美術館に蓄積していくことが、美術館の力になっていきます。

長崎県美術館では、学芸員が5人いてエドゥケーターが4人います。この学芸員とエドゥケーターの協力関係が大事です。昭和45年に上野の博物館にいたとき、ある方が当時は美術品を研究している人が上で、教育をやっている人はB級だって話してました。今やエドゥケーターとキュレーターの力は拮抗しています。美術館の様々な活動が一番緊密につながるのが教育と展示です。調査研究の貧弱のところはよい活動ができていないと思います。ここの美術館には、前に教科調査官になった方がいましたが、大変頑張っていました。

長崎県美術館では、夏休みにオール長崎県の小中学校の先生方を集めて、「出島研修」というのをやっています。そこで、感じるのは先生方が変わると子どもたちが変わることです。だから学校教育の方々が美術館に入ることは大変よいことです。だから、学芸員やエドゥケーターを育てていくことが重要となってきます。

知事 それぞれ御指摘いただきましてありがとうございます。安永さんから昔、宮崎が一番元気だったという発言に多少ショックを受けてます。今もそれなりに元気で、予算の面で大変制約を課していることを申し訳ないなと思いながら、針のむしろで御意見を伺っております。安永さんの話を伺いながら、笹山さんは当時の美術館への思いなり、今の美術館をどう思っておられるかを教えていただきたいと思います。

笹山氏 本当によいチャンスだなと思います。今回、新たな飛躍と期してこのような会をもたれることは、すばらしいことだと喜んで、先ほどから伺っておりました。

確かに開館当時は、県全体の高まりがありました。大学移転も全国で最初の方でしたが、その跡地に総合文化公園ができあがりました。これからを担う子どもたちに夢をもたせ、よい物にふれて、感動する人生を送ってほしいという願いがみんなにありました。美術や芸術だけでなく、教育を含め行政全ての核にしようとする機運がありました。平成6年開校の五ヶ瀬中等教育学校の教育理念が「感動と感性の教育」です。当時の熱気を改めて思い出しています。その高まりが今に重なるように思います。本日、知事もお見えですが、「日本のひなた宮崎県」というプロモーションの根幹に座るのが、恵まれた宮崎の風土であると思います。

知事が先ほどオリンピックの開会式は、神話から始めてみたいと話されました。かつて大岡信さんが「面白い」「面白」というのは、宮崎発の言葉であると話されました。岩戸から天照大神がお出ましになり、光が蘇ってみんなの顔が白くなった、光り輝いて美しいという感動の声、これが「あはれ、あなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、をけ」であり、日本で一番古い歌と言われてますが、囃子詞（はやしことば）です。「ああ、おもしろい、ああ、楽しい、ああ、清らかだ、ああ、すがすがしい」という神々、

人々の声、これは宮崎から発信した一番の感動表現です。

感動表現と言えば、福祉の父と言われる石井十次がいます。岡山から宮崎に帰ってきて新たに事業を起こすときに、「ああ、美なるかな日向の地。ああ、壮なるかな太平洋。」と言って、郷土のすばらしさを讃え、宮崎は「理想的な人物を養成するにおいて、最も適当なところなり。」とうたっています。

感動と感性の人、石井十次から、娘婿である画家の児島虎次郎、そして大原美術館につながるなど、宮崎の財産であります。

もう一つ挙げれば、木城「新しき村」の武者小路実篤ですが、「君も美しい。僕も美しい。美しいものだらけの世界、山と山とが賛嘆しあうように星と星とが賛嘆しあうように人間と人間とが賛嘆しあいたいものだ。」という碑が立っていますが、これも宮崎発の感動表現であります。「人間萬歳」、武者小路実篤は、芸術運動の先駆者でもあります。

そのように考えたとき、この宮崎県の風土というのは、本当に「あはれ、あなおもしろ」、感動というもので一本貫かれている、和し讃嘆し合う心の風土です。

ある新聞記事で宮崎に深めるものがあるかという問いに、安永さんが「新しき村」を御指摘いただいておりましたが、宮崎はそういう材料、財（たから）がたくさんあるところです。それを自覚し、大切にするとところから様々な課題を解決していくときであり、宮崎県立美術館がその拠点となってほしいと思います。

また、今後、宮崎に期待されているのは、美術館と図書館、美術館と博物館、芸術劇場等のコラボレーションです。延岡に渡辺修三という優れた詩人がいましたが、この方は、兄が画家で、弟が二科の彫刻家です。渡辺さんの若い頃のモダニズムの詩に影響されて、シュールの古賀春江の作品があると指摘する人もいます。このように文学と美術という面からの切り込みも必要です。時には、宮崎県立美術館が収蔵している絹谷幸二さんの公開制作「ヒムカ」という作品と中心に据えて、宮崎の風土「日本のひなた宮崎県」と関連付けて深め、広く紹介いただきたいと思います。

船越桂さんが宮崎にお見えになったときに、「宮崎には楠がよく似合う。」と私は話しました。船越さんは、楠材を使って自分の思いを作品にされております。横浜美術館で「森のささやき」という船越さんの作品展がありました。こういう仕事は楠、森、豊かな関係性など、宮崎の神話伝説の世界にもとつながっていると思います。

今こそ宮崎、ひなた、そして芸術、「スポーツランド宮崎」もさることながら「アートランド宮崎」と打ち上げたいと、そういう思いで自信をもってやってほしい。これだけ伝えたくて、ここに出させていただきました。誇りをもってやってほしい。そして、子どもたちに精一杯本物にふれていただきたい。

西側の入口のところに「天泉」という大理石彫刻が設置されております。泉のごとく何もなるところから何か生まれるという作家の思いを込めた作品ですが、これが最後の大きな買い物でした。私がここにお世話になっているときです。北海道美唄出身、イタリア在住の安田さんが「天泉」を据えたときの感動は今でも覚えております。子どもたちに自由に存分に親しんでほしい、遊んでほしいと切々と訴えられました。美術館の収集の特色の一つが現在イタリア彫刻ですが、安田さんの作品は、日本の精神とイタリアで学んだ技術が融合した作品と言われてます。こういう作品が入口で招いています。今後とも開館当時を上回るさらなる発展をしてほしいと思います。また、あらゆる面から御支援いただければと思っております。本当によい積み重ねで、この20周年を起点として取組がなされていることを大変嬉しく思います。

飛田館長

先ほど、雪山さんから富山の知事の話、米田さんから金子知事の話、安永さんからは開館当時の知事の話がありました。

3億円の基金が使えるようになったのも知事や議会のご理解があったおかげです。

また、ある県議が現在開催中の「ウッドワン展を見に行こう。」と話されていました。

今、宮崎県立美術館の取組を一層進展させていこう、発展させていこうというムードが県内に高まっているのではないかと思います。

今までそういうムードの盛り上がりはなかったので、今が潮時で大変なときに館長として来てしまったと思っています。

雪山氏

新美術館をつくっていると切に感じる思うのですが、重要なのは、最終的には人の問題です。どうやって人材を確保し、さらに育成していくか、また、新しい美術館を造るとなると新しいビジョンが必要になります。私は富山近美に4年間美術館に計40年間勤めています。これまで美術館以外に勤めたことはないのですが、思考が硬直していますが、新しい時代にあった人材、そして組織をつくっていかなければならないと思います。美術館の特色を出すためには、やはり斬新な企画力が必要になってきます。そうするためには、どういう組織なり体制をとらなければいけないのか。先ほど米田さんからエディケーターとキュレーターの問題もでしたが、私もこれからは教育活動に力を入れていこうと思いますので、これは重要な提案だと思います。

私は、宮崎県立美術館には、11月か12月に、年1回しか来ないのですが、私がこれまで見た中では瑛九の展覧会が圧倒的にすばらしかったと思います。瑛九は地元の作家ですし、よく調べていました。その担当の学芸員の方が「私は美術館の仕事が好きだけど、本来高校教師だから、遠からず学校にもどらなければならない。」と言っていました。学校の先生が一定期間学芸員を務めるか、あるいはプロパーの学芸員を採用するか、どちらが良いとかではなく、どうやって人材を育てていくのかを真剣に考えていかなければならないと思います。

宮崎県立美術館の資料を見ますとパッケージ展が多いかと思います。私はパッケージ展が決して悪いとは思いません。実は富山県立近代美術館はこれまでパッケージ展をほとんどやっておりませんでした。今年の春、スターウォーズの展覧会を行いました。秋には藤城清治さんの展覧会をします。我々の力でできないような展覧会はパッケージで買うほかありません。パッケージ展は、新たなファンを獲得するうえで重要なことだと思います。アンケート調査しますと、スターウォーズ展では、「初めて富山県立近代美術館に来た。」などの記述がたくさんありました。今後、このような来館者にどうやって富山近美のファンになっていただくかということが重要だと思います。実は、なぜこのようなパッケージ展を行ったかということ、新しい美術館をつくるのに大変お金がかかります。そのためには県民の同意が必要です。富山県立近代美術館は、宮崎県立美術館よりも入館者数が少ないのです。知事からは「敷居が高い。閑古鳥が鳴いている。」といつも言われています。今年の暮れに現在の富山近美は店を閉じるので、最後にお客さんをたくさん集めて景気よく花火を打ち上げたいということでもあります。このように、私はパッケージ展の意義は大いに認めますが、時には独自の展覧会を企画し実現できる、そういう実力を日頃から身につけないといけません。私はスターウォーズ世代ではないのですが、おもしろい展覧会だと思いました。そういう面で視野を広げるといっては重要だと思いますが、パッケージ展ばかり行っていると学芸員に実力が付かないのは事実です。また、残念なことですが、お客さんがたくさん集まる代わりに、学芸員が駐車場での車の誘導に忙殺されるなどの問題も抱えています。

それから、もうひとつ。学芸員にはやはり美術館から、社会に出て行く姿勢が必要だと思います。美術館と地域を結びつけるのが、学芸員の重要な役割だと思います。そのような仕組みを考える必要があります。

米田氏

私は今回の会に河野知事が出られるということは、この会の参加を依頼されたときから、すばらしいと思っていました。私も県庁にいましたからよくわかりますが、知事さんの姿勢で流れが全然違ってきます。私は金子知事さんのときに、1年で辞める予定でしたが10年います。それは長崎が好きになったからです。

金子知事が辞めたときに、在任中の評価の一番が、美術館をつくったことでした。普通は橋をつくったとかでしょうが、美術館をつくったことが1番というのは、滅多にありません。

憲法で日本は文化国家を目指していますし、文化芸術振興基本法ができて、今や国も自治体も芸術文化の充実を図る責務があります。それは「果報は寝て待て」ではなく、「果報は練って待て」です。つまり、美術館関係者も県民も4つの汗を流さないと実現しません。

一番目は、「相互理解のための汗」を流すことです。例えば国交のない国同士でも芸術を通じて交流ができます。

二番目は、「県や市の風格を上げること」です。目に見えないものですが、住民がその町に住んでいることを誇りに思えるかどうか大切です。

三番目は「事業の創出」です。20世紀は、経済と文化が対立関係で理解し合いませんでした。何言っても平行線でした。しかし、21世紀になり、今やデザインの悪い車は売れないし、経済界も文化とコラボしてやっています。文化の方も経済界から支持されないと発展できません。今や持ちつ持たれつに関係にやっとなりました。そういう点でいうと、様々な地域振興の中で、美術館の果たす役割がますます大きくなってきており、事業の創出を図る必要があります。

これまでの3つはピッチャーとしての汗であり、自助努力が必要です。しかし、4番目はキャッチャーです。それは「観光と交流」です。この宮崎県に、県外から来た人たちが県民と交流し議論し発展させていくことです。県民だけではだめです。

観光と交流は芸術文化とつながっていると思います。これはどこの県の館も共通していると思います。そして、美術館にはそういうつなげる力があると思います。

知事

今、富山は、「スターウォーズ展」というお話があって羨ましいと思いました。また、長崎は今、「ピクサー展」をやっているいいなと思いました。大分が「進撃の巨人展」をやって、敷居を低くというか、先ほど若い世代が来ないという話がありましたが、今までの人と違う層に足を運んでもらえるような工夫をされており、羨ましいと思います。私の主観であって、こういう場での議論ではありませんが、前にも話しました「生頼展」とかあってもいいなと思います。

人材育成や学芸員のことについて御指摘があり、また教育効果についても印象に残ったところです。調査研究を充実させることによって教育効果が上がるということがありました。それ以外に、別のアプローチで、この宮崎県立美術館の場合は、美術教諭の方がこちらで学芸員を担っており、そのことによって教育現場が近くなるとか、そういうメリットはないのかなと思いました。若い世代が来ないとか、子どものときの楽しい記憶がリピーターになるとかの御意見を伺いました。海外の美術館に行くと、よく子どもがグループで案内されてどっかの絵の前に話を聞いたり、スケッチを描いたりなどをしています。私が伺うのは恐縮ですが、県立美術館では、そういう取組はされているのでしょうか、また、教諭から来られることで教育効果がより図られるということがあるのでしょうか。

飛田館長

学校から来た職員がいるということは、学校現場とはかなり精通しております。

このような教材（「アートカードボックス」）を手を持って参加者に示す）があります。これは宮崎県立美術館と文部科学省と共同開発で制作したのですが、この会場となっている部屋で鑑賞の仕方を遊びながらレクチャーするなど、いろんな取組をしています。また、敷居を低くする企画としては、例えば、今度「篠山紀信展」をやりますが、違う角度から楽しめる展覧会を考えています。

雪山氏

展覧会を一つ企画し、実現するには、時にはかなり長期にわたる調査研究が必要にな

ってきます。そういう面で、宮崎県立美術館の今の体制で支障はないのかどうか。それから、とくに近年、いくつかの美術館の学芸員がチームをつくって、共同作業で展覧会を開催して、非常によい成果を上げています。そういう場合、先生だけの学芸員では不利な面があるというか、それは否めないかなと思います。

宮崎県立美術館に学校の先生が学芸員として来られるということは、学校との連携についてはうまくいくと思います。宮崎県立美術館の教育活動については、非常によく工夫されていますし、努力されているように思います。学校現場をよく知っているためだと思います。それはそれで正しいと思います。ただそれだけでいいのかということが問題です。その点についてどうお考えですか。

飛田館長 そのことは非常に重く受け止めておりますし、重要な御指摘だと思っております。今後、どうしていくか、先ほど雪山さんが話されました学芸員の話ですが、ここで学芸員として修練を積んで全国のネットワークを広げていくのも一つの方法であり、学校からここに来て戻らず美術館に骨を埋めたいという考え方もあります。また、プロパーで入っている学芸員も頑張っておりますし、その学芸員をもっと伸ばしていくという考え方もあります。今後の人事の在り方についても十分に慎重に検討したいと思っております。

米田氏 長崎県美術館では43万人入っていると話しましたが、夏休みやゴールデンウィークなど、多客期には、今「ピクサー展」をやるなど、人が入る展覧会をやっています。そのような入る展覧会で入館者数をあげます。しかし、すばらしい展覧会で人が入らない展覧会はいっぱいありますが、それでも学芸員に思いっきりやってもらいます。

おかげさまで、西洋美術館に事務局がある西洋美術振興財団賞「学術賞」をスペインの彫刻家のフリオ・ゴンサレスで当館の学芸員がとりました。その2年前は別の学芸員が、スペインリアリスム絵画の巨匠アントニオ・ロペスでとりましたし、美術館連絡協議会（読売新聞）カタログ大賞とか論文でも賞をもらっています。入館者数は増えてませんが、それはその館の勲章でもあり、学芸員にとってもやる気がでます。

よい展覧会に人が入るとは限りません。しかし、館長として1年間をとおして、一定のお客さんを入れれないといけません。だから入らない展覧会をやらしていかないと学芸員はくさってしまうのです。全部打ったらホームランというわけではありません。バントもあればゴロもある。しかし、学芸員たちがやりがいをもってやっていること思っております。

安永氏 開館当時に、先生から学芸員になられた方で上田さんという方がおられましたが、学校の先生時代に台湾に海外研修に行かれたときに、塩月桃甫という画家が宮崎出身ということがわかり、台湾での功績を目の当たりにして、いつか展覧会をしたいと思われたそうです。そして開館後、しばらくして、その方は「塩月桃甫回顧展」を開催されました。本当にすばらしい展覧会で、図録は美連協の図録大賞をもらいました。これが本当の学芸員の活動だと思います。そのような地道な活動をやっていける美術館になるべきだと思います。

上田さんは、本当は美術館に骨を埋める気持ちでおられたようですが、やっぱり学校の方に戻られ、最後は校長になられたようです。美術館にとっては惜しい人材だったなと思っております。

知事 今日は長時間で、時間オーバーしましたが、熱心な御意見をいただいたり、意見交換していただいたりするなど、ありがとうございました。他県でのいろんな取組だけに関わらず、宮崎県立美術館の昔からのことをよく御存知の方からも御意見をいただき、大変示唆に富むものとして受け止めております。今までこういう歩みを続けたわけですが、20年の節目にあたって、さらに次を見据える調査研究の充実、人材の育成、さらには

いろいろなネットワークやつながりをつくっていくこと、それから地域の在り方、また、地域の中でどういう美術館の在り方など、大変いろいろなヒントをいただきました。

今後、しっかり教育委員会を中心に内部で議論しながらよりよいものにしていくために、さらなる議論をしていきたいと思っております。今後とも皆様に御指導いただければと思っております。

美術館のあり方についての議論であります。文化振興行政をどういう体制でやっていくかということが、課題となっております。知事部局に文化文教課があって、そこが文化振興ビジョンなど取りまとめています。美術館の窓口は、生涯学習課で、あと文化財課もあり、文化に関係する課がそれぞれにあって、県によってはそれを一つに文化組織を束ねているところもあります。そういう在り方もどうかということも県庁内部で今、議論しているところであります。そうすることでビジョンのもとで、この美術館の位置付けも変わってくるかもしれません。このことは具体的にどうなるかわかりません。組織の在り方も含め、また美術館についてもしっかりと教育長と議論しながら、よりよいものにしていきたいと思っております。本日の皆様の御協力に重ねて感謝申し上げまして、感想を含めた御礼の挨拶とします。

閉会  
教育長挨拶

本日は大変御多用の中、宮崎にお越しいただきまして皆様方、ありがとうございます。議論の時間が誠に少なくて申し訳ありません。できればあと何時間か御意見を伺いたいと思っております。それから参観いただきました県民の皆様もありがとうございました。宮崎県立美術館の今後の方向というより、これだけ確信をもって御意見をいただいたことに大変ありがたく思っております。今日の議論を踏まえまして、宮崎県立美術館のあり方について、さらに検討を深めたいと思っております。